

The Cambridge Gazette (V. 3)

Personal Letter to Mr. Sato (尊敬する佐藤泰男氏にお送りする私的通信文)

『ケンブリッジ・ガゼット (V. 3): 長目飛耳樹明編』
第 22 号 (2010 年 6 月)

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

一に曰く、長目(チョウモク: 遠方のモノを見通すこと)、二に曰く、飛耳(ヒジ: 遠方の事柄を聞き取ること)、
三に曰く、樹明(ジュメイ: 明察力を具えていること) 『管子』より (松陰先生の『飛耳長目』を倣って…)

今月号の目次

1. 初夏のケンブリッジより
2. 情報解説
3. 編集後記

1. 初夏のケンブリッジより

頬打つ風が心地良いハーバードより佐藤泰男氏に 6 月のケンブリッジ情報を謹んでご報告する。5 月 10 日夜 10 時にシンガポール・東京出張を終えて自宅に戻った。機内では恩師、田口佳史先生の新刊書『論語の一言』を読了した。不思議なことに先生のご指導に従い中国古典『論語』を学ぶと、人生の指針を新鮮な形で体感出来る。実は今日の筆者があるのは田口先生のお蔭といっても過言ではない。同時に当然のこととして田口先生に対するご恩返しなど全く不可能と筆者は悟っている。非力な筆者が出来ることと言えば、この感謝の気持ちを片時も忘れずに少しでも多くの優秀な若い人々に対して先生が私にして下さったような応援を微力ながら行うことだと考えている。さて小誌前号で、5 月 1 日、ハーバード 8 年目を迎えたことを記した。浅学非才の筆者が 7 年間まがりなりにも大過無く過ごせたのは田口先生をはじめ多くの人々のご厚意があったからにはほかならない。同時に筆者のわがままな態度に今更ながら恥じ入っている。本校での第 1 の恩師、デニス・エンカネーション教授が 2003 年 2 月から本校にオフィスを用意して下さったにもかかわらず、日本の会社を 3 月末に辞めた上に、「4 月の 1 ヶ月間はのんびり過ごしたい」と「ぬけぬけ」と言ってしまった—そのことを思い出すと今でも顔から火が出る思いがする。また本校に

対して日本から推薦状が 1 通必要であったが、厚かましくも当時日本銀行の総裁に就任される直前の、そして現在キヤノングローバル戦略研究所(CIGS)理事長、福井俊彦氏にお願いした。当時(そして今も)デフレに苦しむ日本経済にあつてハイパーインフレ気味の推薦状を福井氏に書いて頂いたことに対する感謝の気持ち(と罪悪感)を言葉で表現することは不可能だ。ただ出来ることと言えば、設立されたばかりの CIGS を本学をはじめ世界の優れた研究者から一目置かれるような存在にするよう、優れた仲間と共に努力することであろう。さて冒頭に触れた『論語の一言』はまことに良書である。尊敬する大哲学者ショーペンハウアー先生からギリシャ哲学やインド哲学等多くを学ぶことが出来るものの、田口先生から頂くような「心の暖かさ」を感じることは極めて難しい。確かに名著『意志と表象としての世界 (*Die Welt als Wille und Vorstellung*)』を読めば、自らが驚く程賢くなるであろう。が、その代わりに心が暗くなってしかたがない—曰く、「だから彼(人間)の人生はまるで振り子のように苦悩と退屈の間を往ったり来たりして揺れている(Sein Leben schwingt also, gleich einem Pendel, hin und her, zwischen dem Schmerz und der Langeweile.)」、と。叶わぬ事とは知りながらショーペンハウアー先生に思わず田口先生のご著書を推薦したくなる。また先生のご著書の中に、江戸末期の儒学者、佐藤一斎先生のお言葉を発見した—「一燈提(さ)げて、暗夜を行く。暗夜を憂へること勿(なか)れ。只一燈を頼め」と。即ち一寸先は闇であるこの世の中で足元を照らす灯り—即ち日々研鑽する自分自身—を持って悔いなく生きてゆく。こうして今、ケンブリッジで田口先生のご著書を傍らに「初心忘るべからず」と自らを励ましている。

2. 情報解説

4月末、シンガポールに向かう筆者に、ロシア語に堪能な友人から「ジュンはロシア語に弱いけど、これは面白いよ」で始まる長い電子メールが届いた。自らが露語に堪能でなくても露語に秀でた友人を持つと、まことに便利である。彼はメールの中でロシアの『独立新聞(Независимая газета)』の4月21日付記事「米露で対抗を: アジアで拡張主義を採る中国に対して(Противостоять Китаю США и Россия должны вместе: Экспансионистские устремления Пекина в Азии растут)」を丁寧に解説してくれた。この記事には米露の専門家による対中戦略が紹介されている。米国の専門家の見解に関しては日頃から英文で読んでいるから驚かない。が、ロシアの専門家となると情報に触れる機会は極めて限られており、英仏独の言語を通じて出てくる情報は多かれ少なかれ引用される際のバイアスや誤訳があるために客観性・正確性を欠く。今回は友人のお蔭で、ロシア科学アカデミー極東研究所(Институт Дальнего Востока (ИДВ РАН))のアレクサンドル・ラリン氏をはじめロシアの専門家による対極東観の一部を垣間見ることが出来て喜んでいる。こうしたロシアの考えを中国はどう見ているのかと思い、情報検索してみると、『環球時報』4月23日付記事「米国の政治家は対露提携を提唱し、中国の東半球での覇者となることを阻止しようとする(美政治家鼓吹联手俄罗斯阻中国成东半球霸主)」を見つけた—*Независимая газета* 紙上にある議論に言及し、中国側は警戒感を高めている。この中国の反応を友人に電子メールで返送すると次のようなメールがまた返ってきた—「ジュン、いずれにせよ日米同盟が揺らぎ始めると、中国海軍(PLAN)が太平洋に進出し、ロシアが米国と組んで中国に対してバランスしようとし、東南アジア諸国が米国に危機感を訴え始める。東アジアにおける『公共財』としての日米同盟は大切だね」と。かくして筆者は学べば学ぶにつけ日米同盟の意義を痛感している次第である。

4月28日深夜、シンガポールのチャンギ空港に到着し、5月1日まで開催された本学による track II diplomatic scheme—Asia Vision 21 (AV 21)に参加した。アジアの将来について忌憚無く語り合うという目的で設立されたAV21 に関しては小誌で何度も報告しているが、筆者自身、ケンブリッジ以外で開催される AV21 に参加するのは今回が初めてである。特定分野の専門家が集う学会とは異なる「知的魅力」を持つ学際的な会議は、巷間流布する情報とは異なる視点・側面を垣間見ることが出来、筆者自身毎回楽しみにしている。加えて AV21 ではオフレコ発言を奨励するため、発言者の名前は一切外には公表しないという参加者同士の信頼に基づき会合が進行する。その結果、「分り切った初歩的知識」や「全体の議論には全く関係の無いデータや事実」の羅列がなく、このため対話に参加するのにも「ピリッ」とした適度の知的緊張感が要求されるため退屈することが滅多にない。今回残念なことに尊敬する日本銀行の堀井昭成理事が日本でのお仕事で、またジョセフ・ナイ教授がオックスフォード大学で著作活動(来年発表予定の *The Future of Power: Its Changing Nature and Use in the Twenty-first Century*)に専念されており、このおふたりが参加されなかった。また朝鮮半島情勢の急展開で韓国の方々が直前になって全員不参加となったのも残念であった。しかしながら筆者が所属する Ash Center からはアンソニー・セイチ所長をはじめデニス・エンカネーション、ウィリアム・オーヴァーホルト、ジェイ・ローゼンガード、そして筆者という5人の仲間が参加し、また日本人としては林芳正参議院議員、政策研究大学院大学の黒川清教授、篠原勝弘前カンボジア大使、日本エネルギー経済研究所の十市勉専務理事、国際協力銀行の渡邊博史副総裁、ボストン総領事を務められた山本忠通大使と筆者の7人が参加した。ややオーバーな言い方をさせて頂くと、多くの参加者が日本の凋落に懸念を示すなかで、我々7人は「七人の侍」よろしく果敢な言動で会合に臨んだ次第である。

AV21 の会場は市街地から離れた高台に在るシンガポール国立大学(NUS)のリー・クワン・ユー公共政策大学院。29 日夜の歓迎レセプションでは欧州から舞い戻ったばかりのキショール・マブバニ大学院長が「たまにはケンブリッジではなく居心地の悪い所で AV21 を開催することも良いではないか?」と冗談を仰った。誰が言ったのか失念したが「キショールも考えたね。これじゃ会議の途中で街中に抜け出すことは出来ないよ」、と。本学で開催される AV21 は本校に隣接する「チャールズ・ホテル」で行うから確かに会議を抜け出すことは簡単だ。筆者が最初に AV21 に参加したのは本校に来て1年が経とうとする2004年4月末(小誌2004年5月号参照)。その時、筆者自身が「サボって」しまった—アシュトン・カーター教授、ハン・ソンジュ(韓昇洲/한승주)駐米韓国大使(当時)、グラアム・アリソン教授、モレーン・クレシ元パキスタン首相、そしてシンガポール国連大使(当時)のマブバニ氏が講演する間、筆者はボストン交響楽団(BSO)の定期演奏会でモーツァルト『ピアノ協奏曲第23番』とマーラー『交響曲第1番「巨人」』を聴くため、(AV21の「新入り」であるにもかかわらず)こっそりと抜け出していた。が、今回は物理的制約から友人と共に集中して会議に参加した次第である。翌日の会議では黒川教授がご自身の専門の話をされたが、話が大変面白く、何度も笑ってしまった。また渡邊副総裁もご専門の話をされたが、皆が唸るような切り口で話をされたのには感銘を受けた次第である。林議員や山本大使をはじめ皆が積極的に発言をするので、ローゼンガード氏が「ジュン、ハーバードと違い、ここでは日本の存在感が大きいね」と皮肉交じりに話しかけてくれたのが嬉しかった。今後、多くの優れた日本の若人が(1)一流の専門知識、(2)幅広い一般教養、(3)語学力、(4)マナーと交際術、(5)多角的・重層的な協力・相互補助の精神を鍛えて AV21 に参加してもらえることを切に願っている。筆者にとってこの会議で最も興味深い話題は、①今後の中国の動きと②ヴェトナムの経済発展であった。

即ち、参加者の何人かが、これまで中国にとって peaceful な rise しか選択肢が無かったが、外交・軍事・経済の面で大国となった今の中国には別の選択肢—a dangerous dragon—が見えてきたと指摘した。またヴェトナムでは政治的腐敗がひどいらしく、それは汚職に慣れている中国企業も驚く程と述べる中国の企業家の話には思わず嘔き出してしまった。

さて30日のディナーは「ラッフルズ」の隣「スイスホテル」のレストランで、スリン・ピッスワン ASEAN 事務局長がスピーチを行った。スリン・ピッスワン氏は11歳の時に初めて靴を履くまでは裸足で生活していたというタイ南部で生まれた貧しい少年が、米国の援助で米国に留学するという身の上話をされた。その時少年は暖かいカリフォルニアかフロリダを希望したがミネソタに行くことになり、そのことが同氏の「サバイバル本能」を強くしたと仰った時には笑ってしまった。また2009年7月にクリントン国務長官と面談した時に同長官と交した言葉も参加者に紹介して下さった。そしてその交した言葉は、博士課程の学生として本学で学んだ時に憶えたものであったと語られた時、同氏の真剣な眼差しに改めて感動した次第である。

話は変わるが、会議の合間に多くの人々と日本政治について意見を交換する機会を得た。その時、一国の政治がうまく機能するには大別して次のような6種類の人々の協力が必要というのが多数の意見になったので、ここで慧眼な読者にご報告する。即ち、

(1)カリスマ的政治家(charismatic statesmen)。的確・果敢な実行力と心に響く言葉を通じて子供から年寄りまで全国民に希望と勇気を与える。グローバル時代を迎え海外から観ても国家の威厳を高めるような指導者であることが望ましい。が、そうした政治家も、的確で果敢に実施すべき政策の内容を熟考する時間に関して制約を受ける。

(2)専門家(specialists)。政治家に対し特定分野に關し的確な政策を立案・助言する人。特

定分野に知悉しているとはいえ、限定された特定専門領域で常に考える性癖から、多様な問題を俯瞰的に捉えず偏った視点に囚われる危険に陥り易い。本来、政策とは国家的視点からその優先順位(priority)と時期(timing)を勘案すべきであるから、専門家にそれらを任せるとどうしても蝸壺的な視野に基づく「我田引水」的意思決定の弊害が生じる。

(3)戦略家(strategists)。専門家が立案した特定分野の政策に関して、その政策を実施する優先順位と時期を特定し、それを政治家に進言して補佐する。政策の優先順位と時期の特定化に注意力を集中するあまり、専門家の選別、世界情勢及び内外の世論に対する情報収集、政策の必要性を内外世論に伝達する公報活動に関して時間的制約を受ける。

(4)マスメディア(the mass media)。政治家や戦略家に対して内外世論との介在役を果たす。戦略家や内外世論との情報交換自体に追われるあまり、専門知識に関して疎くなり意見が極端に単純化・幼稚化される危険性がある。

(5)関心層(a smaller attentive public)。政治家、専門家、戦略家、マスメディアの言動を注意深く観察する国民。特定分野の利益に関わるが故に、特定分野の優れた専門家を選別する能力を持ち、しかも社会全体の公益を考慮出来る人々。正確な知識と客観的な判断、そして社会的正義を心がけるには個人的努力を要する。従って国民のなかでも少数に限られる。

(6)一般国民(a broader general public)。純粋に政治家とマスメディアに対して耳を傾ける大多数の良識有る人々。ただ日々の生活に追われて、正確な知識や社会的正義を体得する時間的余裕を持つことが難しい。

以上6種類の人々が協力して初めて一国の政治が機能すると話し合った次第だ。従ってこのうちどれ1つでも欠ければ政治は不安定化する。しかも(a)優柔不断で意味不明瞭もしくは旧弊固陋な言動に終始する政治家、(b)広い国家的視点ではなく自分の分野だけを常に優先する専門家、(c)使命感(noblesse oblige)を失い説明責任(accountability)や透明性

(transparency)を軽視する戦略家、(d)煽動家(demagogues)と結託し、情緒的に偏った、また幼稚化した情報の報道をするマスメディア、(e)自らが所属する特定利益団体だけを考え、対立する意見の人を感情的に敵視する関心層、(f)日々の生活に追われ、政治家やマスメディアの「耳にやさしく、分り易い」情報だけを鵜呑みにする一般国民が横行する時、政治は混乱する。こうした議論をしているなか、筆者は林議員に次のように申し上げた—「林さん、政治家はお年寄りから幼児まで、多くの人に希望と勇気を与えなくてはなりません。林さんはロックバンドのメンバーですよ。是非とも国民が明るくなるような歌を発表して下さい」と。かくして今考えても恥かしいぐらいの図々しいお願いをしてしまった。が、聡明な林議員を尊敬しているが故に、政治家としてもう一回り成長して頂きたいと願って申し上げたことだけは確かである。

東京に戻り、AV21の「常連」たる日銀の堀井理事とボストン総領事時代に積極的にご発言された外務省の鈴木庸一経済局長に今回の討論内容についてご報告方々ご挨拶をした。堀井理事に「堀井さんが不参加のため皆が危機感を抱いたせいか、日本人全員が積極的に発言していました」とご報告したところ、「じゃ、ボクがいない方が良かったかも知れない」と仰ったのには思わず笑ってしまった。また激務の日々を過ごされている鈴木局長が、筆者の拙い報告のためにお時間を割いて下さったことに対し筆者は今も感激している。さて時間は遡ってシンガポールを離れた5月2日の朝、チャンギ空港の待合室で朝食として飲茶を楽しんでいると、国際協力機構(JICA)の緒方貞子理事長がいらっしゃるので驚いてしまった。勿論、その場で声をおかけするような無礼なまねこそしなかったが、成田空港に着いて預け入れ荷物を待っている間にご挨拶させて頂いた。実は緒方理事長は4月23日、本学でご講演をされている。ボストンを訪れた後、大西洋を渡りアフリカを巡ってシンガポール経由で成田に到着されたとのこと。か

くして筆者は太平洋回りで着いたシンガポールで緒方理事長と同じフライトで帰国することになった次第だ。小誌前号で筆者が現在“flying monk”となったことを書いたが、緒方理事長はまさしく日本を代表する“flying diplomat”である。穏やかな笑顔が素敵な緒方理事長にお目にかかり、身の引き締まるような気持ちになった次第である。さて因みに 4 月 23 日、緒方理事長がアジア・センター所長のアーサー・クライマン教授等と共に本学で議論をされた時、筆者は丁度ワシントンDCに出張していた。福井俊彦理事長のお供として、国際経済研究所(PIIE)を訪ね、世界経済の現況や金融制度再編に関して意見交換をしていたのである。否、正確には福井理事長がモリス・ゴールドシュタイン氏やマーカス・ノーランド氏と討論し、その間、筆者は jet lag が原因でもないのに理事長の隣で眠たげに黙っていただけだった。実は PIIE での面談直前、理事長と「リッツ・カールトン」のレストランで昼食を取ったが、その時メニューに懐かしいニューオーリンズ料理を発見してそれを注文した。在米・訪米の経験が有る読者なら容易に想像出来るだろうが、その料理—日本では「超」大盛の料理—を全て平らげてしまったので後が大変だ。PIIE での面談時、筆者は猛烈なる睡魔に襲われており、友人のモリスとマークとの議論を福井理事長に全て「お任せ」してしまったのである。筆者の粗忽さ・軽率さに改めて恥じ入った次第だ。今も猛省していると同時にやさしいお人柄の福井理事長に深く感謝している。告白すると、筆者がリエゾン・オフィサーを務める経済産業研究所(RIETI)の藤田昌久所長も、表現方法が奇妙かも知れないがアポイントメント等で筆者が「無理しなくても済む」お方である。藤田所長は、昨年 1 月に本学を訪れ、本校(HKS)とビジネス・スクール(HBS)で数多くの意見交換の機会にご出席なされた。エドワード・グレーザー本校教授に藤田所長の来訪をお伝えすると、「Dr. Fujita がいらっしゃるのか!!」と大変喜んで下さった。面談時、藤田所長がグレーザー教授の近著を褒められたの

で教授は早速秘書を呼び、そのご著書(*Cities, Agglomeration and Spatial Equilibrium*, Oxford University Press, Sept. 2008)を取り寄せ、サインをして筆者にも 1 冊下さった。このようにして筆者は優れた国際感覚をお持ちの福井理事長や藤田所長の下で現在働いて(本当?)おり、楽しい毎日を過ごしている。と同時に筆者自身も優秀な若手から軽蔑されないように国際感覚を磨き、また日本の若人を応援するような人間になることを心掛けて日々の小さな努力を大切にしたいと考えている。

3. 編集後記

以上で *Cambridge Gazette* (V. 3)、長目飛耳樹明編第 22 号を締めくくる。AV21 の時に、クライマン教授が筆者に対して次のような質問をされた—「先日の Dr. Sadako Ogata の講演は素晴らしかった。また Ben Makihara (三菱商事の榎原稔氏のこと)は立派な人だね。緒方貞子、榎原稔といった素晴らしい国際人がいるのに日本の政治家に国際人がいないのはどうしてなのか、教えてくれない? でも、もしもいるならば、ジュン、紹介してくれるよね?」、と。これに対して筆者は「ご安心下さい、教授。日本は人材の宝庫です。今回ご参加された林議員に加え、若い政治家の多くは国際感覚が極めて優れています。もう少しのご辛抱です。日本は絶対に教授を失望させることはありません」とお答えした次第である。

以上

栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード・ケネディ・スクール	Senior Fellow,
シニア・フェロー	Harvard Kennedy School (HKS)
キャノングローバル戦略研究所	Research Director,
研究主幹	Canon Institute for Global Studies
連絡先	
Mailing address: 79 JFK St., Ash Center, Cambridge, MA 02138	
Office address: 124 Mt. Auburn N235, Cambridge, MA 02138	
Tel: +1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948	
Email: Jun_Kurihara@hks.harvard.edu; Kurihara-Jun@rieti.go.jp	
(日本での連絡先) 〒100-6511	
東京都千代田区丸の内 1-5-1 新丸の内ビルディング 11 階	
Tel: 03-6213-0550 (代); Fax: 03-3217-1251	
<small>過去の <i>Cambridge Gazette</i> は全てネット上で見ることが出来、ダウンロードも出来ます。ネット上で「Google グループ」のウェブサイトに行き、そこで「Cambridge Gazette」と打ち込めば、<i>Cambridge Gazette</i> が載せてあるサイトに導かれます。</small>	